

昭和二十四年七月二十三日 第三種郵便物認可
昭和五十九年三月十五日 発行 (毎月一回十五日発行)

(通第四一六号)

木村無相師追悼号

目次

私の詩と信仰		木村無相		(1)
煩惱と私		全上		(11)
木村無相師の終焉		岩崎成章		(16)
無相さんのこと		西元宗助		(18)
木村無相さんの死		榎本栄一		(20)
木村師の御法信		榊原徳草		(21)
木村さんを悼む		花田正夫		(23)

慈光

第三十六卷 第三号

木村さんの放送二篇

木 村 無 相

(註)「これはNHKのラジオ「宗教の時間」に放送されたものです。文中の細字は聞き手の方の言葉であります。」

「今日は、折り／＼の心境を『念仏詩抄』として発表され今も福井県武生市の老人ホームで、詩を書き続けている木村さんの「詩と信仰」を御紹介いたします。木村さんは昭和五十三年に七十四歳、明治三十七年二月に九州八代のトンネル工事の飯場で生まれました。」

*

(一) 私の詩と信仰

父が土方の親方でしたので私達一家は、父の仕事の都合で、日露戦争後の満鮮各地を転々と渡り歩いたのです。私が小学校を卒業するまでに、七校も転校した程に。

事情あって私は入籍されないで木村姓ですが、父は吉田といつて、とても酒好きな太った人で、背中一面に石川五右衛門が百日カヅラで、朱鞘の短刀を抜いた入墨をしていました。

満十四歳で朝鮮の平壤で小学校を卒業してからは、平壤裁判所の給仕をしたり、大連の建築屋の小僧にやられたりしましたが、結局は私一人で日本に帰って来て、神戸の県立工業学校の建築科に入学して、新聞販売店の住込みの配達員などして、大正十三年に満二十歳でそこを卒業したのです。

おもい出(一)

われかつて、

死なんとしたる

山に来て

鳥の飛ぶ見ぬ

雲の往く見ぬ

死なんとしては

死ねざりし

二十歳の頃の

純情も

おもい出として

なつかしき

子供の頃から、世の中の濁った中で転々として育ったので、とてもませて、すれていました。そして親の生活を批

母は、女バクチ打ちとまで言えませんが、大変バクチの好きな人で、未っ子の私は、よくバクチ場からバクチ場に連れて行かれて、小学校にもそこから通ったことがあります。巡査が来ると、子供の私までが窓から逃げ出したり、家に帰ると、至って短気な父に「このガキまでババアと、バクチに行ったりしやがって」と、母と一緒に追い出されて、空家に寝たりして……。父と母とは、実によく喧嘩をしました。子供の私達姉弟が「いつそ別れたらどうか」と言うほどに。

工事中は、若い職人が何人か家に居ましたが、その人達は、月末の勘定を貰うとすぐに、その土地々々の女郎を買いに行くのでした。

そういう飲む・打つ・買う・夫婦喧嘩・各地転々の中で育った私は、どうも落着かず、人生が不安で、生きているのがイヤで「なんでこんな世の中に生きておらんなんののだろうか」と、いつも思っていました。

判し、世の中の奴は皆薄情だというふうに、悪いところばかりに眼をつけて——まあ、えらい悪いことですが、陰ではお父さん、お母さんとは言わずに、ジジイ・ババアと言っていたのです。

「たのみもせんのに、こんな世の中に生んでくれやがって、自殺するなら、先ずジジイとババアを殺してから、そのあと、薄情な世の中の奴らを、五、六人は殺して死ななければ引き合わん」と、十五、六の頃は表向きはおとなしい子と言われながら、肚ではそんなことを考えていた私でした。実にひどい性格でして——そのくせそういう自分は、さほど悪いとは思っていませんでした。そりやまあ、まるつきり良いとも思っていないかもしれませんが、それは実に微かなもので。

ところが、忘れもしない満二十歳の十一月三十日の夜のこと、ある事が縁になって、今まで外ばかりに向いていて、両親や世間を批判することはかりをしていた眼が、どうしたとか、一斉にパッと自分の内側に向けられてしまつて、それは決して、自分でそうしようとしてそうだったのでなく、パッとそうなった。

そうになったら、さあ大変——人を憎んだり、恨んだり、嘘ついたり、ゴマかしたり、腹立てたり、そういう色々の煩惱が、心の奥のどこからか次ぎ／＼と現われて来て、そ

それぞれの働きをしては、次ぎ／＼と消えて行く。心の奥は暗くて、どれだけ深いかわからない——「これはまあ、何というヒドイ俺の根性か」と全く驚いて、「この悪い煩惱の心を断ち切って、悟りが開きたい」と、そう思い立ったのです。

それは神戸の工業学校を卒業して、東京の警視庁の建築課に勤めていた満二十歳の時のことでした。

*

「その頃、すでに一家は離散、縁あってその後、鹿児島の小学校の代用教員になった無相さんは、次第に大きく重くなって来たこの問題のために先生をやめて、求道一筋の旅に出かけます。満州の各地を放浪し、昭和四年には先輩に誘われてフイリビンの開拓地に渡り、さまざまな宗教の門を叩きます。

昭和八年、自分の問題を解く鍵は仏教の中にありそうだと気付いて、満二十九歳で日本に帰ると四国遍路をはじめます。そこで耳にした愛媛県のある寺で、三年間真言の教えを学びますが、自力の教えを受けるには自分の力が足りないことを自覚して、今度は徳島県の真宗のお寺で四年間他力の教えを学びます。しかし、ここでも自分の煩惱を除く出口は見出すことが出来ず、寺を出る決心をします。」

*

お寺を出てからの昭和十五年の一年間は全くスランプで

立ったのでした。

*

「再び法を聞く決心をした無相さんが、今度教えを受けることになったのが、三重県の松原致遠さんの寺でした。」

*

松原先生には、昭和十六・七年とマル二年お膝元でお育てを頂いたのですが、先生はお若い時はかなり御気性のはげしいお方だったとことですが、それだけに、その業の深い中から現われて下さるお念仏は、まことに身に沁みるものがあり、それは／＼常念仏の尊いお方でした。

先生は、毎月講演や御法話の旅へ出られて、お在寺は月のうち僅か一週間ほどでしたが、私は先生のお在寺中は、どこへでも着いて行くのでした。——それはいつも御法の事しか念頭にないお方でしたから、ついてさえ行けば「木村さん、この弥陀の名号称えつつのつ、つはなあ」という風に、その時々のお味わいを独り言のように言ってお聞かせ下さるのでした。

それはお念仏に聞き入るような御態度で常念仏のお方として、本堂でのお説教の時も「ここはお念仏の道場ですから、ここではお念仏を申して下さいよ」と仰言るので、お詣りの人達もお話の間には、ナンマンダブ・ナンマンダブと静かにお念仏を申し乍ら次のお話を待つのでした。

した。お寺を出る時に私は「お前はとても駄目だ。なんば聞いても読んでも頭だけで、胸にはちよつとも受けつけない。仏法は落第だから、求道とか聞法は止めにして、自分の身についている煩惱だけで生きることにして、街へ出て他の人と同じように働きなさい」と自分自身に言い聞かせてお寺をお暇して、それから、つてを求めて静岡市のある個人会社の住込み事務員として働いたのですが、その当時も続いて送って下さっていた松原致遠先生の個人雑誌の、『無碍道』も、帯封も取らずに押入れの中に放り込んで、誤楽雑誌を読んだり、映画に行ったりしていました。

その年の十月のある日、会社が休みで映画から帰りに、静岡駅の前を通りかかった時、全く思いもかけずフツと、「生死出離」ということは、南無阿弥陀仏と、今ここに既に成就されているではないか！という声が閃いたのです。私は愕然として思わず立ち止ってしまったのでした。寺を出てからの一年間は、仏法についてのことは全然考えたことが無かったのです。しかし心の底では矢張りその事が問題であったのか、問題にして下さったお方があって、眼を放さないでいて下さったからか、「生死出離」ということは、南無阿弥陀仏と、今ここに既に成就されているではないか」と、フツと知らされて「ああ、これはこうしては居られん。南無阿弥陀仏について、真剣に聞こう」と思い

私も真言時代から、お念仏だけは口についていましたから、お念仏申しましたが、煩惱とお念仏との関係がつかないないので、そのお念仏の味わいはわからないのでした。

先生も見ると見かねたんでしょうねえ。奥さんも女中さんも留守のある日のこと、先生と二人で昼食をすませて、先生はナンマンダブ・ナンマンダブと御自分の書齋に行ってしまうわ、私は洗った茶碗・皿を水屋にナンマンダブ・ナンマンダブと申しながら片付けていましたら、書齋の方から先生がバタバタと走るようにやって来られて、私の後ろに立たれて、驚くような劇しい大きなお声で「名号とは？」と仰言った。私は思わず反射的に大声で、「功德！」とお答えしましたら「いや、智慧じゃ！」と、叩きつけるように云い捨てて、先生はまた書齋の方に、ナンマンダブ・ナンマンダブと行ってしまわれたのです。

そこで私、ひどく考えさせられてねえ。「俺がお念仏を功德として称えているので、先生がやりきれんで、教えに来て下さったんだなあ」と……。それから後はずっと、そのことについて考えましたが、先生の寺でお世話になっている間は、それが分らなかつたのです。聖人も『唯信鈔文意』に、「この智慧の名号を濁悪の衆生に与えたまえるなり」と仰言って下さっているのに――。

*

「南無阿弥陀仏の名号が、煩惱に苦しむわが身をお助け下さるという味わいが、三十路の中ばを越えても、無相さんにはどうしても受けとれず、再び若い頃学んだ真言の道を求めて、高野に登ります。こうして高野山の大学で勤め乍ら法を聞き行しますが、ここでも迷いが消えず、行の途中で山を降りてしまします。」

*

おもい出 (二)

生き死にの
道にまどいて
来し聖山に
深雪降るなり
空ふかきより

高野の山に
のぼれども
ころ空しく
くだりたる
わが若き日の
かなしみも
この齡にして
なつかしき――

*

い。ひどい根性です。

「鯛ならよいが、鯛だったらどうでしょう」身だけ頂けとあるが、私の会った人が「鯛だったら――」というわけで、それはまことに傲慢なものです。表向きだけは殊勝げに「どうか、お聞かせ下さい」と言っていますが――。

丁度、今朝拝読した聖人の『唯信鈔文意』の中に、「心口各異」というお言葉がありました。口で言うことと、肚の中とがまるで違う。「邪見傲慢悪衆生、信樂受持甚以難」とありますが、その邪見な根性を抱えながら、我が力で信心を得て助かるうというのですから、随分、盗人たけだけの話です。しかもそれを性懲りもなく何十年となく繰り返かえして――。

*

「二度三度、真言と浄土の間を迷い歩いているうちに、五十の坂を越した無相さんが、最後に落ち着いた処は、いずれの行もおよび難い人間を助けてやりたいという、弥陀の本願力に救われている世界でした。」

自分の傲慢さに気付かされ、どうもがいても自分の力では助からぬと知らされた時、同時に、如来の救いの手が差し延べられていることにも気づかされました。そこは自分のあがきを捨てた処に、広がっていた世界でした」

*

「高野山を降りて、再び浄土の教えを聞き始めますが、又又数年にして真言の教えにひかれ、再び高野山に登って、今度は真言の道場で行学しますが、もう五十の坂を越える年齢になってしまいました。」

*

橋 慢

「そうやって
聞き歩くのもよいが
鯛にも骨がある
身だけいただかれよ」
能信院師のおんさとし

鯛ならよいが
鯛だったら
どうしましょう
これを傲慢というのでしょうか
「邪見傲慢 悪衆生
信樂受持 甚以難」

これは、能信院師の記録にありますが、私はどんな良いお方に会っても、骨ばかりをあさって、身は頂こうとしな

ひらくもの

わがこころ
貝のこどくに
ふと閉じぬ
そのかなしみを
ひらくもの
ただ念仏の
ほかはなく
ただ念仏の
ほかはなく

この蓋を、この堅く閉じたこの蓋を、わが力では開けることが出来ません。開けようとすればするほど、蓋は堅くなりません。貝なども蓋を外から開けようとするとするほど、蓋は開きません。

ところが、お念仏さまはそうでない。内から、この煩惱熾盛の内から、また底からというか、一念も煩惱を離れずにこれを照らし、護り、そこに生きて働いて、このかたくなに閉じた蓋を内から和らげて、他力自然に開けて下さるのです。

それで結局、私はいつの場合もナニカにつけて、ナンマ

ンダブ・ナンマンダブで、「阿呆の一つ覚え」ですが、それ私も覚えていたわけではなく、お念仏さまが忘れておくれぬ。それこそ「寝ても覚めてもへだてなく」私の煩惱の内らで働いて下さって、この業人の口を開いて外に、ナンマンダブ・ナンマンダブと現われて下さる——。

結局はいつも南無阿弥陀仏さまが、お念仏さまより外ないというところに、立ち帰らせて下さるのです。

*

ひらかれると

自分が

ひらかれると

自分が

ひらかれると

自分が

ひらかれると

天地いっぱい——

*

「ひとたび『天地いっぱい』という世界を知っても、人間の心は生きもの、煩惱は次ぎから次ぎに湧き出ます。」

*

の中より、名号をえらびとりて、五濁悪時。悪世界・悪衆生・邪見・無信の者に与えたまえるなりと知るべし」とありますが、私はこの「無信の者」というお言葉に、いきなり足を払われたように、驚ろかされたのでした。

私がもともと「無信の者」であるのなら、私がどれだけ自分の力で信者になろうとしても、なれる筈がない。もともと信の芽が出るような種がない、根が無いのですから。

「信じて助かろう」にも「信ぜよ」言われても「信心正因だ」と言われても、どれだけ言われても——。ところが、さあ、そう言われると、すぐに私は自分の胸を見る。そして有りもせん信心を探す。そして、無いということも、よくわからんのですねえ。わからんからこそ、なんとか此の凡夫持ち合わせの心を働かせて、それで信じて助かろうとするんです。何十年となくそうして来たんですが、こんな者がどれだけバタバタしても、肝腎の信の根がまるきり無い「無信の者」とあっては、なんとしても真実信心になれよう筈はなく、私としては、「信」ということには、全くお手上げの外は無いのです。

そういう私に残された唯一の道は、如来さまが、「よろずの善の中より選びとりて」お与え下されるという南無阿弥陀仏の御名号を、ただ／＼お与えのまんまに、ナムアマミダブ・ナムアマミダブと、「悪衆生・邪見・無信の者」

そのままで

信者になつたら

おしまいだ

信者になれぬ

そのままで

ナンマンダブツ

ナンマンダブツ

「信者になれぬそのままで、ナンマンダブツ・ナンマンダブツ——」ところがコイツが、信者になりとうて、なりとうてかなわんです。ちよつとチヤホヤされると、すぐ信者顔して喜んでゐる。煩惱が喜ぶんですねえ。

けれども、信者にかかつてゐる御本願ではないんでしょ。信者になれない、どうしても信者になることの出来ない私にかかつてゐる大悲の御本願でしよから、信者になつてしまつては、もう聞こえない。それなのに、ちよつとチヤホヤされると、すぐに嬉しがつて信者になつてしまつて、自分は聞こうとしない。聞かせ屋になつてしまつては、自分にはもう聞こえせんわ。

聖人の『唯信鈔文意』の中に、「釈迦如来、よろずの善

のまんまに、「信者になれぬ、そのままで」おいただきするより外に私の道は無いのです。

*

歓喜というも

私の苦勞ばなし

ナニになる

如来さんの御苦勞

聞く一つ——

「聞其名号 信心歓喜」

如来さんの御苦勞に

わしや歓喜——

歓喜というも

ナムアマミダブツ

歓喜というも

ナムアマミダブツ

とかく人さんにお会いすると、私は煩惱で自分の苦勞ばなしをし勝ちです。また、向うさんもそれをお尋ねになるところがこんな者が、一生だろうが万生だろうが、どれだけ苦勞したつて、お助けの一段になると、こんな者の苦勞や体験では助からんのです。

それで私はこう思うんです。体験・体験言っても、『歎異抄』にも、『弥陀の誓願不思議に助けられまいらせて往生をば遂ぐるなり』とあって、『無相の体験に助けられまいらせて往生をば遂ぐるなり』とは無いのです。それで、

〇「わたしの苦勞話、ナニになる」で、聞^きくべきものはひとえに「如来様の御苦勞」であると言う外はありません。

私としても、真言時代ならともかくも、聖人のみ教えを聞かせていただく今としては、自分の苦勞や体験めいたものに、功を持たせるわけにはいきません。

それで「如来さんの御苦勞に、わしや歡喜」と云っても、私の歡喜なんて言うものは、ほんの一次的なものですから、「歡喜というもナムアミダブツ」で、如来様の御苦勞をナムアミダブツといただくまんまが、私における歡喜であつて、お念仏の外に、ヤレ歡喜だ、ヤレ苦勞だ、ヤレ体験だと、腰かけるようなものは、何一つ無いのです。

*

冬晴るる

遠きやまなみ
雪にかがやき
われ今ここに
いのち生くる

今日ひと日、
ひと日のいのち
冬晴るる

私は「われ今ここに、いのち生くる」という今日ただ今の「生」に、「いのち」に、驚いているのですが、また、「今日ひと日、ひと日のいのち」という「今の無常」にも、この齡になつて驚いているのです。

私、この老人ホームに来てマル四年になるんですが、定員五十名のこのホームでも、毎年、三人や四人は亡くなるんです。ついその間もお一人亡くなりました。

私は二十歳の頃から、煩惱、煩惱と煩惱ばかりを苦しめて来ましたが、無常ということはそれほど実感としては問題にならなかつたんです。ところが、此処に来てからは、日ごろ親しく語り合つて居た人が次ぎ／＼と病みこんでは、ゴソリ／＼と亡くなられるので、さすがの私も無常ということ、身近に感じずには居られなくなつたのです。

大体私は持病の腰痛が悪くなり、仕事が出来なくなつて、此処に入所させて貰つたんですが、その上に去年の春ごろから心臓の発作がたび／＼起るようになって「こりや俺も、いづとうなるかわからんなあ」と思うようになったのですが、そう思う時に、人生・人生と云つても、今日一日／＼

のことでしかないのだなあ、いや、今のひと時／＼より外に私の人生は無いんだなあ、そう思うようになったのです。

そう思うと、今、この今のひと時に自分の全分を打ちこまなければ、私の人生は生温いものになってしまう。それでこの頃は、手紙を書く時も、人さんにお会いする時も、本当に「一期一会」の思いで向わなければ、私の人生がつまらんものになってしまうと思うのです。

ところが、日々の生活の実際には、かけがえない今日一日を、今のひと時を、「ああ、つまらんことをしているなあ、つまらんことを言っているなあ」と思うことの多い私です。

*

あ あ 幸

雲みれば
雲の呼びかく

水みれば
水の呼びかく

ものみなに
呼びかけられつ

ものみなと
親しみ生くる

あ あ
幸、幸――

私に呼びかけている。雲が水が私に呼びかけている。ふと気づくと、ものみな私に呼びかけている。時には、そう感じられる此の頃です。

この老人ホームは、どの部屋も六帖で、二人の定員です。から、私の領分はこのまん中の電灯からこつち半分の三帖でして、私は腰痛の持病なので長く坐つて居られず、机も無く、朝から晩まで殆ど寢床の中で、読んだり書いたりしているんですが、寝ていてフト天井を見ても、壁を見ても、電灯を見ても、みな私に呼びかけている――。

「無相よ、皆同じ大きなイノチの中に生かされているんだよ。そしてお前は、本願の名号以外には助かる道は無いんだよ。ああ、こうだと朝から晩まで一日中、ゴタ／＼といろんなことを考えたり、言つたりしているが、詮ずるところお前の道は南無阿弥陀仏より外には無いんだよ」ともの皆に呼びかけられている気がしてならないのです。

そしてまた、雲が、水が、天井が、壁が、私をとりまく一切が、ナムアンダブツ・ナンマンダブツと、大いなるいのちを讃嘆しているように思われてならんのです。
生を受けて七十四年、いろ／＼なことがありました、ものみなに、呼びかけられつゝ生かされて生きて在ることの幸せを、しみじみと思うことです。

*

生きるということ

ああ

生きるということの

むつかしさ

生きるということの

ありがたさ

生きるということの

不思議さよ

ああ

生きるということ

生きるということ

生きるということ

くようで、痛いのと苦しいので、勿体ないけれど念仏も、ありがたいも、殊勝げなものは何も無くなって、ただ苦しい／＼と云うだけで――そんなに苦しかったら死ぬるかも知れんと思うゆとりもない、こんなのですわ。

今まで、死ぬ／＼と手柄のようによく言ったり、書いてきたが……狭心症発作で、あとで思うと死ぬほど苦しいんですね、その時はそう思うことも出来ない。三年、四年と発作を五返・十返と繰り返してきたから、はじめてイヤ死ぬかも知れんと思うようになったんです。

苦しくない時は、しょっちゅう死が頭で問題になったんですわ。一昨年頃に、フツとです。ああしてこうなつたと話しますが、その方が順序はよろしいが、実際問題は、フツとですな。二十才の頃も煩惱を断ち切ろうとして真言はむつかしい、フツと如来さんに助けて貰うより仕様がないと、勿体ないがそう思ってナムアマミダブツナムアマミダブツと称えました。

フツとばかりです、順序もない。その後三十一歳の頃にも静岡で働いていた頃、出離生死ということはナムアマミダブツに成就されてあると、フツと自分に気づかされました。煩惱具足ということは書いたり喋ったりしてきて、種々とならべたてて、それより外に何もありませんと云ってきしたが、一寸もわかっていなかった。『念仏詩抄』に

*

(二) 煩惱と私

(註) ラジオの宗教の時間に放送されたもので、NHKの教養学部の金光寿郎さんが、昭和五十九年に武生市の和止苑に木村さんを訪ねてお聞きしたものです。木村さんは本年七十九歳で二十歳の頃、煩惱を断じて悟りを開こうと、真言や念仏を求めて六十年になる。十年前『念仏詩抄』を発表されたが、その後、持病の腰痛の外に心臓病で狭心症の発作をくりかえしていられます。

○

腰痛の外に狭心症の発作で呼吸困難を起し、それを何十回となくやりました。それが信仰の上から云うとよかったです。初めの頃は、苦しくなるとそれを誤間かそうと思つてテレビを見ているんですが、段々苦しくなると、それまでに一応きいているもんですから、お念仏申し、ナムアマミダブツナムアマミダブツとやっているが、勿体ないことだがお念仏さまも仏法も、鉄砲も吹きとんでしまった。何もなくなつて苦しい／＼ばかり、ものを云うのも苦しいので苦しいと云うことも出来やしない。その時の苦しいことは、フライパンの上に油をいれてそれで胸をあぶるような、焼

ぼんのうよ

ぼんのうよ

わたしがわるいのだ

ぼんのうは

わたしのいうまま

ぼんのうは

わたしのおもつまま

ぼんのうよ

わたしがわるいのだ

この時、昭和四十五、六年頃の詩ですね。それまで、煩惱具足の凡夫と煩惱を目の仇にしていたが、煩惱が悪いんじゃない、わたしが悪いのだ。煩惱を目の仇にしていた私が悪いんだ。自分では煩惱と云いながら、向うに見ていて、煩惱が悪いんだ、これを断じて悟りを開こうと考えていたのが間違っていた。

煩惱よ、わたしが悪いんだ、お前が悪い／＼と思つていますが、煩惱はわたしの云うまま、思うまま、煩惱よ、わたしが悪いんだ。煩惱は正直なもので、わたしが腹を立てる

とすぐ腹を立て、欲をおこすと、欲をおこす。素直に私の云う通りにしてくれるので、煩惱がわるいんじゃない。煩惱をつかって悪いことをしているわたしが悪いんだ。これに気づいたのが十余年前の話である。

それから、そのわたし自身が何かわからなかったが、私というものが、そいつがどうか、こいつが煩惱をつかっている。そうか煩惱の根元というか、無明煩惱の姿が、私なりにすごく感じられた。つよく、フト私が悪いんじゃない、この私というものに気がつかなかった。この話を聞いてもらって、あとで聞いてもらおうと思っている、来年はわからんからね。

○

私という人間の本性、自性というものはね、それはもうわが身可愛いという一点張りだね、我利、我執のわが身ばっかり、自分可愛いばかり——それも本当の意味で可愛いんじゃないでしょうけれど、私自身からいうと、我身可愛いというのが根本で、人が思うようにならぬと腹を立てたり、自分に都合がよいとよるこんで、三毒の煩惱というが、その自分がわからなかった。ナルホド自分が可愛いというところから、そこから貪欲・瞋恚・愚痴がおこる。自分に都合が悪いと腹を立ててはねのける、文句をつけているが、物の道理はちっともわかっておらん。我身可愛いが

根本で、本当の道理がわからん、つまり愚痴じゃね。貪・瞋・痴とみんな三毒の煩惱ばかりで、それがわからなかった。自分というものの根本煩惱というか、根本無明ということが——それは本当に我身可愛い这一点張りで……それをひどく感じたね。ひどくエゲツなく、これがどうにもならんとひどく感じられた。

「自身は現にこれ罪惡生死の凡夫、曠劫よりこのかた、常に没し常に流転して、出離の縁あることなし」という善導様の仰せは、私としては、これは煩惱を断ち切ろうと真言の山に登り、又山を下って真宗を求めて往復しているうちは、自分が助かったようなことを云ったり、書いたけれど、本当の自分は助かっていない。自分の心の底にあるものは、

「無明煩惱しげくして塵数のごとく遍満す

愛憎違順することは高峯岳山にことならず」

でした。その時にね、正信偈の源信和尚のお言葉、往生要集にある「極重惡人唯稱仏」とあるが、惡人とまでは或程度までは、アア／＼ボウと感じますが、極重惡人とあるのが、ちっとオーバーすぎるような気がしてね、実感としていただけなかったが、そのどうにもならぬひどいエゲツナイ、我執、我愛の自性というものに気づかされて、成程極重惡人といわれるはずじゃと、ピツたりと感じられた。

うわつつらだけ煩惱、煩惱と云うたけれど、うわつつらでなくて、煩惱でどうにもならない、三世ブツ通しの迷いの根本、この我執、我愛の根性、この極重惡人に念仏往生という願いがかけられている。極重惡人唯稱仏。なぜ唯稱仏と。この極重惡人に弥陀の本願はどこにかかっているかと云えば、この根本無明と我執我愛のこの上にかかっている。

「ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべし」

と歎異抄にあつて、よく覚えていたが、ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべしとあるのが、弥陀の本願であつて、ただ念仏せよと云うのが、それが、本願であつてこの極重惡人の上にかかっていた。今まで本当にピツタリとシツクリとただけなかったのも、この姿がわからなかったからである。ただ惡人とおっしゃらんで、成程極重惡人という我執我愛の抜き難い三世ブツ通しの、このどうにもならん、ここに唯稱仏という誓願がかかっている。

三十一才の真言の時に、如来さんにたすけてもらうより他仕様がないう、しょうがない、そんなことはもう私の底の底まで見抜ききつて、念仏もなくなつて、苦しい苦しいの自分になつてしまふ、そんなことは如来様はお見抜きになつて、仏法ぎらい、念仏ぎらいな、格好だけは名利のために種々云うているが、どこから出ているか、我身自

身、この我利々々の我執の得手勝手な、自分じゃどうにもならぬ。ここに、これを見抜かれて本願を建てられた。ただ念仏と、この私のここにかかけられているんじゃないと気づかされたんじや。

「無相さん、今頃になつてそんなことを云うのか」

というけれど、しょうがないわな。今まで、たとえのことは云つたが、それは格好はよいが、死ぬということになつても、わかっているようでも、本当はわかっていないんじゃないな。人にはわかつたようなことを云つたり、書いたりするけれども、本当は身について何にもわかっていない。本当に何にもわかつたらんのですな。

仏法げなこと、宗教的なこと、殊勝げなこともわかっていない、自分で書いたり云つたりするけれど、それが別に嘘と思つて云うたのではないが、そらごととたわごと、まことあることなしですな。

来年はおるか、おらんかわかんけど、そのままを聞いてもらった。それで身には仏法とか鉄鉦とか……鉄鉦とは云わんけれど、ありがたいこと、その外一切宗教的なことは身について何んにもない。聞いてわかる程度で、ぜんぜん身についておらん。それをね、また気づかせてもらい、そしてね、『歎異抄』の十二章かにね、

「他力真宗のむねをあかせるもろ／＼の正教は、本願を

信じ念仏をまほさば仏に成る、そのほかに何の学文かは往生の要なるべきや」……そのあとに「まことにこの理に迷ひはんべらん人は、いかにもく学文して本願のむねを知るべきなり」……そのあとに「一文不通にして経釈のゆくちも知らざらん人の称へやすからんための名号にてまします」

聞いてほしかったのも、ここを云いたかったんです。ここは多少わかる。私は学校に行かんから、真言のことは多少学んだが、ともかくも多少わかると思うていたら、豈はからんや、身についた学問となると全くわからぬ、一文不通である。真宗のことは、いや仏法のことは何をもつてきても身についていない、何ひとつついていない。成程、こいつこそが一文不通にして経釈のゆくちをも知らぬ奴であつただなあ。成程この者のために、称えやすき名号を案じ出だしたまうて下さつたんだ。成程、ただ念仏せよ、そのまゝお念仏とはこの私のためであつたとはじめて……いやこの者のためであつた。わかつてたすかうとして、何一つ身につかない、こういうことね。

「凡夫というは、無明煩惱われらが身にみちみちて欲もおほく、瞋り腹立ち、そねみねたむ心多くひまなくして、臨終の一念にいたるまで、とどまらず、きえず」とあります。臨終の一念にいたるまで、無明煩惱の凡夫

木村無相師の終焉

木村無相師には、去る一月五日昼頃、福井県武生の養護老人ホーム、和上苑より師の危篤の報あり。翌朝早々航空便にて小松に参り、病院に直行。しかし既に同日午前四時命終された由、御遺体は白藤苑長さんの御寺、本堂に安置されてあり、平素親交のあつた附近の方々に見守られて静かに横たわつておられました。

御顔はさながら生けるが如く、今の今まで熱心にお念仏聞思の御述懐をいただき、忽然として御声嗽を止められ去られた如く、全く感無量の外なし。

省みれば過去十年間の和上苑生活のうち、実に六度も御入院を重ねられ、小生には慈光誌を御縁として、昭和五十四年以来、毎月専ら古人の語録を中心に、師の御実感を拝聴し、質疑応答を重ねて参り、それが度重なるにつけて翌月の御訪問を、今度は如何なる御縁がたつかと心持ちにして下され、身にあまる御昵懇をいただいたのであります。

枕頭のメモに依れば、最後の御入院は十一月十九日にて、

来生の聞え

として まことにどうにもならぬと、この我執我愛のどうにもならぬ、この煩惱の私として、根本煩惱から一歩も出られぬ、外道の改革でなくして、一句の法文も私はうけつけぬ、煩惱のまんまで、一生最後の最後まで煩惱で生きさせていただきます。それよりほかに私はないのです。それを一生のあいだ、このままでただ念仏せよと、ただ声に、口には、心からでは駄目です。深刻になれない、その奥に我執がひかえている。そのまんま自身では信者ぶっているが、心からは深刻でも駄目である、名利心ばかりである。

ただ口に称えよとの仰せのままだに、オームや九官鳥が人間に教えられてナムアマミダブツと発音するだけです。私の念仏は、ただ念仏せよという仰せのまんまに、ただ念仏一つ、極楽でなく地獄におちるかも知れぬ、極楽はお手あげや、この仰せのままで、一文不通のともがらであるこんな極重悪人が、ただ仰せのままだにナムアマミダブツ々々々々々と折にふれて思い浮んでくる。仰せ下さるままだに口にあられて下さる。発音念仏させていただくばかり。それ以外は何にもない。私に結構なものを求めてもあかん。

こういう話をしながらあんな方を感じさせようとする心が動いているかも知れん、自分が格好いい話をしたのでね。アッハ、ハアハ。

川崎市 岩崎成章

十二月二十六日におたずねした所、食欲もなく、気力も大分衰え、小生にとりては最後の御述懐であつた。

師曰く『こんな身体が悪くなると、又仰せ一つということが、ありがたくいただいております。体力も気力もない、ナムアマミダブツと称える力がない。胸に來てもそれから先きがつまつてしんどい。この間は三日も忘れている、ナムアマミダブツ、ナムアマミダブツ。ほんまにそうやなあ。』

お念仏一つ、お念仏一つというけれど、我々の称える念仏とか、称名はこれまた、そらごとたわごとみたいなもので、このような者に、ただ念仏せよというよき人の仰せ、如来のお勅命が、ただ念仏せよとお勅命がかかっている。かかつておるといことが、仰せ一つということが、お勅命せよと云う仰せがふりかかつておることがあるがたい。これ一つでたくさんなんだなあ。その上に信ずるだの、称えるだの、もうさらに屋上屋を重ねるようなもの。ただこん

なものに、念仏衆生、撰取不捨と云うか、如来の御目がとまったと云うこと、そしてただ念仏せよという仰せがふりかかっておる。それだけで充分だったなあと、改めてしんどい上から感じさせられておる。徳泉寺さん（小生の自坊）に仰せ一つが掲げられてあるとか、ほんまに仰せ一つでよい。それだけでよいと此頃あらためて思うことである。

ナムアミダブツ、ナムアミダブツ、ただ念仏のみぞまことにておわします。その念仏はとなえるだけがまことであるともとれるし、その念仏は我が名をとなえよとの念仏の仰せでもある。ナムアミダブツ、ナムアミダブツ。

お説教聞いても、歎異抄の本を読んでも、親鸞におきては「がはつきりされない。観経下々品、汝若不能念者、応称無量寿仏」と信ずると云う念ずることも、まかせるといふ念ずることも駄目、はからいをしなないと云うことも出来ぬ、如来にまかせせることも出来ぬ、念ずると云う、心に属することはみな出来ない。その者は、ただ口に称えよ、むづかしいことではない、オーム念仏ナムアミダブツ。発音念仏するだけ。口一つである。

よき人の仰せからみな御縁がうまれてくるのだ。あんたやわたしはその点しあわせや。思うことは一寸も変らんということじや。生れた性というものは一寸もかわらん。

（岩崎が、満足です、と申すと）来年一月三日に死んでも

無相さんのこと

無相さんが遂にこの世を去られた。ご命終の三日前に無相さんは、「生き死にの道は、タダ、タダ、ナムアミダ、唯、称えよの仰せばかりぞ」と、よまれたと、和上園の白藤昭武師から、臨終とお通夜の模様を記したご書簡をいただく。なお京都からは故金子大栄先生令息宏氏と大屋憲一教授等がお通夜に参席されたと。

無相さんからの最後のお手紙は、昨年暮れの十二月十五日付の速達便で、それは無相さんの最後の力をしぼった、三日間がかりの長文で、それには無相さんの気がかりなあることにも触れたナムアミダブツに終始するものであった。そして思いがけないお電話は、二十日の夕刻で、電話口にも聞こえるハア、ハアという荒い息づかいをされながら、半分は聞きとりがたいお言葉で「およろしく、ナンマイダ／＼」と。これが最後のお別れのお言葉となっていました。

このとき私は、武生の林病院に駆け参りたい思い一杯で

かまわんやろう、ナムアミダブツ、ナムアミダブツ。』

後髪をひかれる思いで手を堅く握り、お別れしたのでした。病床中のメモを読ませていただきます。

「点滴に右手をとられて字が書けず、体力もなし、ただナムアミダブツ」

「聖人がお待ち下さる由なれど、今しばらくは生きられるかも」

「病みふして重湯もノドに通らねど、ただ念仏のあるがうれしき」

「八十の峠なか／＼越えられず、七十九才マル九ヶ月」

「煩惱のころのままにナムアミダ、ただナムアミダ」

「煩惱のオカゲで願に値い得たり。煩惱さまよ、念仏さまよ」

「聞いても読んでもナニものこらぬ、そのまんま、ナムアミダブツ、ナムアミダブツ」

六日その夜は和上苑の職員の方々と有縁の皆様と御通夜、翌朝かねての遺言通り、福井大学医学部へ献体の運びでありました。

ナムアミダブツ、ナムアミダブツ。

一月七日夜記す。

西 元 宗 助

あった。しかし、如何んせん、そのとき家妻は肺炎のため高熱を出し、入院の手續中で、どうすることも出来なかったのである。そんなことで、無相さんの命終の悲報も、入院中の家妻の病室で知った。このことは、あるいは本誌前号に追記したかと思えますので省略（家内はお蔭と全快退院）

○ 無相さんとの出会い―ご縁は、いつごろからであったか。あれこれ顧みると、どうもこの世ならぬ、あの世からの宿世のご縁であったようで、全く不思議というより外に云いようのない不可思議の仏縁であった。

私が無相さんと出会いましたのは、わたしのおぼろげな記憶では昭和三十年代になってからで、それも無相さんの格別に尊敬された花田正夫先生の本誌か、又は洛西・浄住寺における榊原老師主催の一道会のご縁であったかと思う。しかし私のはっきりと記憶しているのは、昭和三十一年の秋から始めた京都・鞍馬口の明光寺での「歎異抄の会」に、

当時、東本願寺同朋会館の下足番でありだった無相さんが、にこにこなさりながら参加下さって恐縮したことである。そしてそれから親しくしていただいた。

尤も無相さんのあるときのお話によると、昭和二十九年の夏、私が高野山大学の集中講義に上山したとき、高野の専門道場である真別所に学生に案内されてお参りした（それは身に覚えがある）、そのとき真別所の主任代理として修行僧の面倒をみていたのが自分で、この方が西元センセイかと、思ったとのこと。そしてそれが最初のご縁と。

そういえば無相さんと高野山とのご縁は甚だ深い。もともと無相さんは高野の真言僧でありだったのである。

わたしは殆んど毎年、したがってこの三十年、前述のように七月月上旬になると高野山に上り、十五日の間滞在してまいりましたが、そのたびごとに無相さんのお噂が出た。たとえば無相師は、高野で最もきびしく修行したお一人であつたということ。その無相さんが、こともあろうに東本願寺の下足番とは、なんという尊いご修行であろうかということ。

なお無相さんは、敗戦前後の昭和二十年ごろは、高野山大学の学生課に勤めておられたようで、そのころはまことに厳しい「親爺」であつたということ。しかし菩提心のある学生を無類に大事にし、土曜日の夜は、それらの学生

木村無相さんの死

燃えつきる

——木村無相さん——

未明に

ひとつ火が燃えつき

視界から消え

あの火が遠くから

私を照らしていたのを知り

昭五九・一・一九。

かすかな余韻

あの人も逝き

この人も亡くなり

遠い山のお寺の鐘のような

かすかな余韻が

を自分の庵に集めて食事を供し（当時は食糧欠乏のひどいとき）。これらの学生を叱咤激励したということ。現在高野山大学を背負っておられる松尾有慶学長も、高木伸元学部長お二人とも文学博士。も、いわば無相さんのお弟子であつて、殊に高木伸元先生は、もし無相師にお会いすることがなかったならば、多分自分は中途退学して、破滅の道を歩んだことであろうと、おっしゃりながら、ともかく自分たちがこうして真言密教学に打ち込むことの出来たのは全く無相師のお蔭。ところで高野山大学に戻ってみれば、肝腎の無相先生は下山して居ない。こんな淋しいことはない。

ともあれ、このように無相さんは、今日でも高野山では真言宗とみなされるほどに高野とご縁深く、わたしも亦案外にご縁が深い。そしてこのようなこともあつて一層、無相さんは私に親しみを感じてくださったのではないかと思う。

ナムアミダブツ ナムアミダブツ と、この小文を結ぶ。

榎 本 栄 一

私のこころにしみる

昭五九・一・二八。

今日は大阪もめずらしく一面の雪、福井の武生あたりはさぞ深い雪であろうと思つても、今は「あるじ」いまさすでございます。

花田先生も無相さんも私も一、二ヶ月の違いで、同一線上に並んでいるようでしたが、その一つが欠けました。大きないのちの波のうねりを感じます。

肉親の縁のうすかった無相さんに、諸先生の御こころ、まことにありがたく、かたじけないきわみでございます。



木村師の御法信

榊 原 徳 草

昭和五十八年十月二十日（木）夜六時。和上苑
半盲無相

池山先生の御著書を拝読申しまして、諸先生方の池山先生についてのものを拝読申しまして、まれな純念仏の御信心のお方と仰がれることでございますが、先生の御著書、特に『仏と人』が百華苑に品切れでありますこと、まことに残念でございます（略）先生御往生になられてからもう四十六回忌でございますか。先生は御往生になられてから、ます／＼生きていられる感じがしてならぬことでございます。まことに／＼お念仏のあるところ、親鸞聖人、池山先生が生き／＼と生きていられて、ナムアマミダブツナムアマミダブツのほかないことでございます（略）一道会刊の意識歎異抄の一番最後に池山先生がいつも「南無阿弥陀仏、これだけだよ、これだけしかないんだよ、これだけいいんだよ」と申されていたと、池山寿夫先生が書き残して下さいました。これがいつも／＼ありがたくありがたく想い

出されることでございます。

私も一昨年の八月「極重悪人唯称仏」ただ念仏しての私なりの体感以来、今日までまると二年、念仏聞思させていただいて来まして「ただ念仏して」のよき人の仰せ、如来様の御勅命以外はないと、日々忘れても／＼その下からくぐって御催し下さる御念仏様の御催しごとに、ヤレアリがたや、とこのごろは、ひとり居ての御称名が多くなりまして、ひとりしみじみと御念仏さまを喜ばせていただいております（略）

これも数十年わからなかった念仏の強制強要としか受取れなかった、次の二首の御和讃が、決して／＼強制でなく、お念仏の最上最尊なることを思えば、それは聖人さまの大悲心からのおすすめにただかれ、まことに有難いことでございます。

その二首の一首は、いわゆる信前の人へのおすすめか、「疑惑和讃」の中の

信心の人におとらじと 疑心自力の行者も

如来大悲の恩を知り 称念仏はげむべし

「はげむべし」であり、もう一首は「正像末和讃」の

弥陀大悲の誓願を ふかく信ぜんひとはみな

ねてもさめてもへだてなく南無阿弥陀仏を称ふべし

「ねてもさめても」であります。歎異抄第九章に「よくよく案ずれば（念仏申さることは）天におどり地におど

るほどによろこぶべきこと」であります、まことに／＼御念仏申さるということは、たとえ一声なりとも「天に

おどり地におどるほどによろこぶべきこと」さえ身にしみて頂かれるならば、「はげむべし」も「ねてもさめても」へ

だてなく、南無阿弥陀仏を称ふべし」も、当然のことです

ございます。然るに、自分がさほどに御念仏の最上最尊さを

一度も体感せずして、念仏申しても踴躍歡喜の心なきこと

を、ただ「煩惱の所以なり」として、お念仏の最上最尊の

尊さを一度も体感せずその味を知らぬことには気づかず、

踴躍歡喜の心なきことを、「煩惱の所以なり」と片附けて、

恬として恥じないのはいかがかと思われま

す。

私は今まで何十年間、「よく／＼案じみれば、天におど

り地におどるほどに喜ぶべきこと」ということを、実に軽

く読みすごして来たことかと、今さら第九章をろく／＼拝

読出来ぬ自分であつたと、この頃気付かされて、前記二首

の御和讃のかたじけなさを、しみ／＼と思われられ、忘れても忘れても忘れたまわぬ御念仏の御催しを有難く頂いております（略）

その御念仏さま、「正覚大音響流十方」と毎年の一道会に段々とお参りの方々が多くなること、ただならぬ如来、聖人、池山先生の御恩、一道会諸先徳の御蔭としみじみ思うことでございます。

この身体はいつ大発作がおこるかかわからぬ身にて、福井市へも三年も行ったことなく、とても京都までは行かれず『仏と人』を三十日（日）には音読させていただきます（略）

右の最後のところに

ナムアマミダブツ

ナムアマミダブツ

ナムアマミダブツ

ナムアマミダブツ

合掌

五十八年十月二十日（木）夜七時半。

とあります。又一道会へ御供料も入れてありました。

最後の辞世の歌は

生き死にの 道は ただただ 南無阿弥陀仏

ただ称えよの 仰せばかりぞ

木村無相さんを悼む

花 田 正 夫

一月五日に、川崎の岩崎成章さんから「和上苑からの電話で無相さん重態の由、これから航空機でお顔だけでも拝みにまいります」とのことでした。次いで一月六日に、和上苑の白藤苑長から午前四時逝去の電話、更に岩崎さんからも同様の知らせを貰いました。更に福井県今立郡池田町の加茂淳光さんからも詳しい報せをうけました。
私自身病身とて御伺い出来ず、独居してお偲びしておりました。私への最後の御手紙は次の通りでありました。

*

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

十二月二十九日(金)朝七時十五分

林病院、二階の二人部屋にて

木 村 無 相

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

五十八年 十二月三十一日(土)ゴゴ三時。

木 村 無 相

花田先生――

ダメです。もう書けませんので、これにて失礼いたします。

*

「旧作」と思いますが、

生き 死にの

道は ただ ただ

ナムアミダ

ただ称えよの

仰せばかりぞ

旧作ではないようで……。

イキ苦シク、タンノウエン、イタク、終日どうにもなり

ません。

奥様におよろしく／＼おとりつぎ下さいませ。

○

オタヨリいただいても、長く御返事ユキマセン時は、ア
ルイは長のオイトマと思って下さい。「死亡通知ハガキ

花田正夫先生

十二月二十三日消印のオタヨリ、二十六日においただき
しながらこんなに御返事おくれました。

十一月十九日入院以来、四十日、もうペンをもって御返
事お書きする人は、

一、電話御不自由な花田先生

二、電話全然ダメの大ツンボの榎本栄一さん。

三、昭和四十八年九月入園以来、毎月一万円づつ「切手
代」として助けて下さる京都の若い院長、福島昌彦

さん(十年、ハガキのヤリトリバカリ)

の三人だけですが、それすら御返事なか／＼書けぬこと
になりました。

ここまで、起きて、腰かけて書いても、コシがいたく
たく、書けなくなりました。

○

ナムアミダブツ

名ボ」事務所にわたすのを油断してわすれました。

ナム ナム ナム ナム

合 掌

私と木村さんは、一月違いの同年輩。昭和四十六年六月
以来、慈光誌に毎月、念仏詩抄をいただいて五十八年六月
まで続けて下さいました。それから詩が書けなくなった由
で、御恢復をお待ちしておりましたが、とう／＼今回のお
別れとなりました。

二回にわたってNHKのラジオの宗教の時間に放送され
ましたものを掲げましたが、そこに、「自然法爾、義なきを
義とす」という親鸞聖人の八十八歳の円熟された信境に立
たれております。その終りの聖人の和讃に

「よしあしの文字をも知らぬひとはみな

まことのころなりけるを

善悪の字しりがほは

おほそらごとのかたちなり

是非しらず邪正もわかぬこの身なり

小慈小悲もなければ

名利に人師をこのむなり」

とありますが、木村さんはこの味わいを身をもって私共
に言い残して下さいました、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏。



あとがき

榎本栄一様は、木村さんと双壁と申せる念仏の詩人であります。一般に詩と聞くと詠歎のものを連想しますが、お二人は生活のままだが言葉となったものであります。

三月の彼岸が近くなりました。本月号は木村無相さんの追悼号とさせていただきます。沢山の人々から惜しまれ慕われた無相さんでした。多くの人から「亡くなられたと思わない」と云う手紙をいただき、今更のように「生死を超えた徳光」を仰いでおります。

ラジオの放送は、教養学部のチーフディレクターの金光さんの御蔭で、私もテープに録らせて貰っております。この二篇は、貴重なものとなりました。

又毎月遠い川崎市から無相さんをたずね、聞法を続けて下さった岩崎成章師は、珍らしい求道者でありました。無相さんの終焉の記録をいただきました。

西元先生は、和上苑に木村さんをお訪ね下さって、その信味を度々慈光にいただきました。今回は特集号として、原稿も縮めて下さいました。

榊原徳草老師は、木村さんが徳島の寺に居られた頃から出遭われ、爾来永年の間信交を続けられました。今回は、長文の法信をいただきました。ことに無相さんが、晩年に池山榮吉先生をお慕いになったことを述べておられます。池山先生が「ただ念仏して、とは、よき人の仰せに聞いたきわみであり、信の告白としてのかなめであり、また人に信をすめるおくのでもある」と『仏と人』に書かれていることも思い浮かべます。

先日、龍谷大学の学長、千葉乗隆先生に承わると、木村さんの『続念仏抄』が、京都の文昌堂から出版される由であります。出来ましたら御紹介いたします。

なお次号に、福井新聞にのせられた「日曜清談」木村さんの記事をいただきます。ことに木村さんを和上苑に紹介し、御自坊に籍まで移された加茂淳光さん（池田町誠徳寺住職）

の御苦勞によりますものであります。

○

三月の第三日曜に、一道会の例会を、鬼頭康彦さんの宅で催させていただきます。

定価	半年 八〇〇円（送共） 一年 一六〇〇円（送共）
編集人	名古屋市南区駈上一丁目四十二番 集発行人 花田正夫
電話	八二二局七〇三七番
印刷所	愛知県西加茂郡三好町大字福谷 坂部光雄
発行所	名古屋市中区駈上一丁目四十二番 振替口座 名古屋 六一〇七〇番 郵便番号 四五七

慈光社